

令和8年(2026年)6月15日

開館40周年記念展覧会

シリーズ **THE DAIMYO**

テーマ展 「^{てん かいち}「天下一」^{めんうち}」の面打
^{めいこう}「^{わざ}一名工の技 ^{ゆうげん}幽玄の美^び」を開催します



このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催しますのでお知らせします。つきましては、広報についてご高配を賜りますようお願い申し上げます。

記

1 展覧会名称

テーマ展 「^{てん かいち}「天下一」^{めんうち}」の面打^{めいこう}「^{わざ}一名工の技 ^{ゆうげん}幽玄の美^び」

2 会 期

令和8年(2026年)6月18日(木)～7月20日(月・祝) *会期中無休

開館時間：午前8時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

3 会 場

彦根城博物館 展示室 1

4 展示の趣旨

「天下一」とは、近世初期、主に^{いもじ}鑄物師、^{ぬし}塗師、^{とうこう}陶工などの優れた職人に授けられた称号です。そもそも「天下一」という言葉は、平安時代以来、世に比べるものがないほど優れた人物や場所、出来事などを形容する際に用いられてきました。室町時代後期になるとこれを自称する職人が現れ、桃山時代、織田信長や豊臣秀吉が一部にその使用を許可したことにより、優れた工匠の称号となったとされ、以降、大いに持てはやされるようになりました。しかし、これを自称する者が急増し、後に看板などで乱用されるに及び、天和2年(1682)、江戸幕府によって使用が禁止されました。

能の世界では、能面を制作する職人である^{めんうち}面打に、「天下一」を与えられた者がいます。近江国日野の法界寺の僧である^{ぼっかいじ}角坊は、文禄2年(1593)、名物面の^{すみのぼう}写しを短期間で制作した功により、面打として初めて、秀吉からこれを授かりました。その2年後には、面の制作を家業とする^{めいぶつめん}世襲面打家のひとつ、^{おおの}大野出目家の初代、^{ぜかんよしみつ}是閑吉満(1527～1616)が同じく秀吉から「天下一」の称号を与えられました。また、許しを得た時期は明らかではないものの、^{ゆうかんみつやす}是閑の息子の友閑満庸(?～1652)や^{おうみいせきけ}近江井関家の4代家重(?～1657)

など、複数の面打が「天下一」を称したことが、これを冠した焼印から確認されます。彼らはいずれも、整った明快な造形の優品を残していますが、中でも是閑と家重は名工として名高く、特に家重は彩色に優れ、「古今無類最上の名人」と絶賛されました。

桃山時代以降、能面は、種類ごとに定まった型を踏襲することが制作の基本となり、優れた古い面の写しが盛んに作られる「写しの時代」となりました。「天下一」の面打の作もまた尊ばれ、その写しが数多く作られました。能の各流派に伝来する面はもちろん、江戸時代の大家の伝来面あるいは道具帳にも、彼らの作とされる面が多く伝わっており、「天下一」の面がいかに好まれ、尊重されたかを物語っています。

本展では、井伊家伝来能面の中から、「天下一」の面打の作と伝わる面を一堂に集め、その写しなども併せて展示します。これらを通して、名工と称された面打それぞれの作風や特徴に迫るとともに、「天下一」の面をめぐる文化について紐解きます。

5 展示作品

32件（別紙リストのとおり）

6 観覧料

一般 700円(560円)

小・中学生 350円(280円) ()内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

(1) 関連講座

名称：「「天下一」の面を見る一巧みの技と造形」

日時：令和8年(2026年)7月12日(日)午後2時～ *90分程度

会場：彦根城博物館 講堂

定員：50名 *当日先着順、午後1時30分より受付開始

資料代：100円 *展覧会の観覧には、別途、観覧料が必要

講師：茨木^{いばらき}恵^え美^み（当館学芸員）

(2) ギャラリートーク

日時：令和8年(2026年)6月27日(土)午後2時～ *30分程度

会場：彦根城博物館 展示室1

講師：茨木恵美（当館学芸員）

その他：観覧料が必要

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：茨木 恵美

電話 0749-22-6100

Mail museum@mx.hikone.ed.jp

テーマ展「天下一」の面—名工の技 幽玄の美—展示作品リスト

番号	名称・作者	焼印	数量	時代	所蔵
「天下一」～優れた工匠の証し～					
1	信長記 巻13 小瀬甫庵著		15冊のうち1冊	江戸時代初期成立	彦根城博物館(井伊家伝来典籍)
2	雲竜釜 伝辻与次郎作		1口	桃山時代	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
「天下一」の面打					
3	太閤記 巻14 小瀬甫庵 著		22冊のうち1冊	寛永2年(1625)序 万治4年(1661)刊	彦根城博物館(井伊家伝来典籍)
是閑吉満～天下一是閑～					
4	能面 中将	「天下一是閑」	1面	桃山時代	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
5	能面 中将	「天下一是閑」	1面	桃山時代	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
6	能面 狸々	「天下一是閑」	1面	桃山時代	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
7	能面 小姫	「天下一是閑」	1面	桃山時代	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
8	能面 曲見	「天下一是閑」	1面	桃山時代	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
9	能面 泥眼	「天下一是閑」	1面	桃山時代	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
友閑満庸～天下一友閑～					
10	能面 小喝食	「天下一友閑」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
11	能面 小喝食	「天下一友閑」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
12	能面 中将	「天下一友閑」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
洞白満喬～天下一備後・天下一淡路～					
13	能面 泥眼	「天下一備後」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
14	能面 童子	「出目洞白」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
15	能面 平太	「出目洞白」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
16	能面 小飛出	「出目洞白」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
井関家重～天下一河内～					
17	能面 今若	「天下一河内」	1面	江戸時代初期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
18	能面 小面		1面	江戸時代初期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
19	能面 増女	「天下一河内」	1面	江戸時代初期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
20	能面 山姥	「天下一河内」	1面	江戸時代初期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
21	能面 鷹	「天下一河内」	1面	江戸時代初期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
大宮真盛～天下一大和～					
22	能面 小面	「天下一大和」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
23	能面 長霊癒見	「天下一大和」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
児玉満昌～天下一近江～					
24	能面 童子	「天下一近江」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
25	能面 怪士	「天下一近江」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
26	能面 泥眼	「天下一近江」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
27	能面 小尉	「児玉近江」	1面	江戸時代前期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
「天下一」の面を写す					
28	能面心覚記 井伊直亮筆		1冊	江戸時代後期	彦根城博物館(井伊家伝来典籍)
29	能面 般若	「天下一河内」	1面	江戸時代初期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
30	能面 般若		1面	江戸時代中期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
31	能面 般若	「中村直彦」	1面	昭和時代初期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)
32	能面切型 童子 友閑打		9枚	江戸時代後期	彦根城博物館(井伊家伝来資料)

写真解説

1 能面 小姫 焼印「天下一是閑」 1面 (作品リストNO. 7)

面長21.0cm 面幅13.7cm 面奥7.0cm

桃山時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

面裏に、是閑吉満 (1527～1616) が用いた「天下一是閑」の焼印がある若い女の面。小姫は若い女の面の中でも、特に明るく華やかな表情です。

是閑は、世襲面打家のひとつ大野出目家の初代。文禄4年 (1595) に豊臣秀吉から「天下一」の称号を授かった、桃山時代を代表する名工です。「天下一是閑」を称する以前の作は知られていません。

是閑の面は、なめらかで光沢のある彩色が特徴です。本作の艶のある肌にもそれがよく表れています。くっきりとした目鼻立ちや張りのある頬といった、充実感溢れる、整った造形も実に巧みです。また、面裏には、焼印に加え、是閑の知らせ 鈐 (面打が自らの作であることを示すために残す鑿跡) である、鼻孔の下の3本の彫り跡があります。



知らせ鈐



焼印「天下一是閑」



面裏

2 能面 怪士 焼印「天下一近江」 1面 (作品リストNO. 25)

面長20.5cm 面幅14.7cm 面奥8.4cm

江戸時代前期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

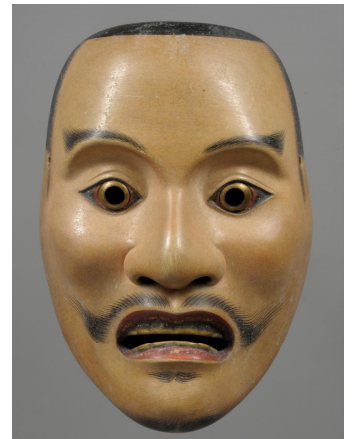
児玉満昌 (?～1704) が用いた「天下一近江」の焼印がある、男の怨霊の面。

満昌は、世襲面打家のひとつである児玉家の初代。越前出目家の養子となりましたが、後に離縁し、京都で活動しました。喜多家初代の長男寿碩と親しく、同流の面を多く制作しています。その作は、「近世の上作」と高く表されました。「天下一」の使用が禁止された後は、「児玉近江」の印を用いました。

怪士は、主に武将の怨霊の役で用いられる面です。黒目に金環を嵌め、白目に朱を注ぎ、人ならざる存在であることを示します。この面は、菱形に見開いた鋭い眼差しをしており、高い頬骨と削げた頬が引き締まった印象を与えます。江戸時代の面らしい、明快で洗練された造形感覚がうかがえる作品です。



焼印「天下一近江」



面裏

3 ^{のうめんこころおぼえき} 能面心覚記 ^{い い なおあき} 井伊直亮筆 1冊 (作品リストNO. 28)

縦19.0cm 横13.0cm

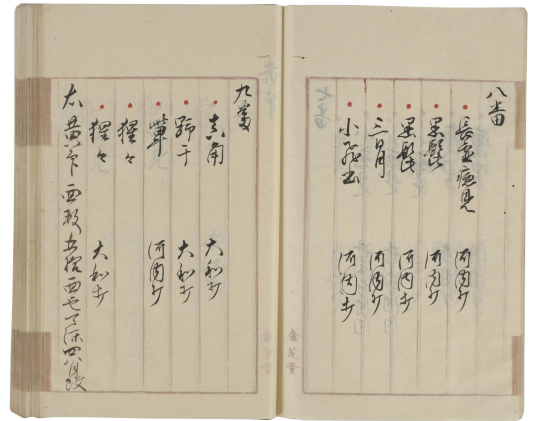
江戸時代後期

当館蔵 (井伊家伝来典籍)

井伊家12代直亮^{なおあき} (1794~1850) 自筆の能面の道具帳。前半には、11代直中^{なおなか} (1766~1831) までに収集された325面を、後半には、自らが購入した50面を記します。

これらの内、作者が記されたものを数えると、大半の面打^{めんうち}が10面未満なのに対して、「天下一近江」を称した児玉満昌^{こだまみつまさ}と「天下一河内」を名乗った井関家重^{いせきえしげ}が、ともに46面と飛び抜けて多く、同じく「天下一」を称した是閑吉満^{ぜかんよしみつ}、友閑満庸^{ゆうかんみつやす}(?~1652)、洞白満喬^{とうはくみつたか} (1633~1715)、大和真盛^{やまとまねもり} (?~1672)の面も、それぞれ10面以上確認されます。

これらの中には「写し」も含まれると考えられますが、能の各流派や他大名家の伝来面、道具長帳においても、同様に彼らの面の割合が高いことが指摘されており、「天下一」の面打の面がいかに愛好され、尊重されたが分かります。



「河内打」(井関家重作) と多く記される

4 ^{のうめん} 能面 ^{はんにか} 般若 ^{やきいん} 焼印 ^{てんかいちかわち} 「天下一河内」 1面 (作品リストNO. 29)

面長21.1cm 面幅16.9cm 面奥9.3cm

江戸時代初期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

般若^{はんにか}は、能面の中でも最もよく知られた面のひとつ。嫉妬と恨みが極限に達した、女の怨霊の面です。2本の角を額に生やし、大きく開いた口には金の歯牙を表します。

この面は、その表情と面裏の表現から、室町時代に遡る般若の名品、^{こんばるけ}金春家の^{ほんめん}本面 (永青文庫蔵) の写しと判断される作品です。面裏には、^{おうみいせきけ}近江井関家の^{いせしげ}4代家重 (?~1657) の焼印「天下一河内」と2種類の^{がんな}知らせ鉋 (額の右隅の浅い放射状の彫り跡、鼻孔の間の2本の彫り跡)があります。家重は、特に彩色に優れ、「古今無類最上の名人」と絶賛された名工です。細かな凹凸をつけて彩色した柔らかな肌と、巧みな彫技による微妙な立体表現が相まった、穏やかな作風が特徴です。その洗練された面は、能役者だけでなく武家にも大いに好まれました。この面は家重作の優品で、激しい怒りを表しつつも品位が感じられる表現となっています。



知らせ鉋
(鼻孔の間の2本の彫り跡)



知らせ鉋
(額の放射状の彫り跡)



焼印「天下一河内」

面裏

5 ^{のうめん}能面 ^{ほんにや}般若 1面 (作品リストNO. 30)

面長21.0cm 面幅16.6cm 面奥9.4cm

江戸時代中期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

作品4と同じ、^{こんばるけ}金春家の^{ほんめん}本面の写しです。^{いせきえしげ}面裏に、井関家重の^{がんな}知らせ鉋とされる^{おおの}鼻孔の間の2本の^{でめけ}彫り跡があり、大野出目家6代の^{ほかんみつな}甫閑満猶(? ~1750)による、家重作との鑑定銘が記されています。しかし、表情が生硬で、面裏の彫りも簡略化されており、家重の作とは考えられません。知らせ鉋が家重と同様のものであることを踏まえると、この面は、作品4のような家重による金春本面の写しを、さらに写したものと考えられます。中世に遡る本面だけでなく、「天下一」の名工として名高い家重の面が尊ばれ、写しの対象となっていたことを示す作例です。



知らせ鉋
(鼻孔の間の2本の鑿跡)



面裏